

書評と紹介

田中宣一著『名づけの民俗学』
—地名・人名はどう命名されてきたか—

辻 貴志

本書は、成城大学名誉教授の田中宣一氏によるものである。田中氏は日本民俗学を専攻し、特に年中行事の研究を重ねられてきた。氏は命名の研究に深く関心があり、その講義の内容を書き下ろしたのが本書である。命名に関する日本民俗学や人類学的研究は少なくない。本書の特徴は、従来の「名づけの命名」に対し、「名のり的命名」、「期待地名」といった切り口から「名づけ」という営為を再考する試みである。本書目次には章立て番号が確認できないが、全五章に区分できる。以下、各章に便宜上番号を振り、本書の構成と内容が明確になるよう書評を行う。

第一章「物に名をつけること」では、日本民俗学における命名研究の歴史、命名体系、命名の力について概説される。

日本民俗学では、早く（昭和初期）から、人びとの生活の構造を説明すべく命名研究が行われてきた。命名研究を先導したのは柳田国男である。『地名の研究』では、地名や地形から地域開発の履歴や可能性が考究された。『蝸牛考』、『野草雑記』、『野鳥雑記』では、生物の名前の分析から、生物に対する人びとのまなざしが明らかにされた。さらに柳田は、各地域の物・行為・行事に関する言語表現資料集成である「分類習俗語彙」を編纂執筆した。柳田の命名研究は、名前にと

どまらず、人びとの造語力を追求した。

柳田以降の命名研究は、主に固有名詞に向かった。渋沢敏三『日本魚名集覧』では、魚名の収集・分類・考察が行われた。川名興は、植物名にオジイのような語がつけば本物に類似した植物であることを具体的に解明した。地名と実生活の關係に注意が向けられた谷川健一編『地名の研究』、千葉徳爾『地名の民俗誌』などの研究も日本民俗学の命名研究を推し進めた。

現在の日本民俗学は、町村合併などにより消失する地名の保護に活発ではないが、資料の蓄積は行われている。

従来の命名研究は、造語法により、的確さや命名の由来を重視して展開されてきた。例えば、犬（一次命名）―飼い犬（二次命名）―柴犬（三次命名）―ぼち（四次命名）。一次命名は幼児でも理解できる。二次命名以下になると雑種として一括され、個々の名前に關心を持たない心性や生き方が問題となる。一方で、三次命名、四次命名まで熱心に細分化される。命名研究は、もはや単なる日本民俗学の言語芸術や口承文芸研

究の枠を超えている。

命名の主な目的はモノの記号化と弁別であるが、忌み言葉、祝い言葉、呪文・唱え言に確認できるように、命名には言葉に宿る靈力への期待も込められてきた。

第二章「生活から地名が生まれる」では、日本における地名の研究史が明らかにされる。そして、様々な自然環境を利用して生きる人びとと地名との關係が日本民俗学の事例研究から説明される。

日本の地名研究は、平安時代に源順『和名類聚抄』によって始まった。江戸時代に地名研究は本格化し、新井白石『地名河川兩字通用考』や本居宣長『国号考』の研究も確認できる。地名の分析手法は、地名の漢字表記や漢字の意味に頼る語源解釈が主であった。

明治時代には、吉田東伍『大日本地名辞書』が編纂され、『地名学研究』雑誌が刊行されるなど地名研究が進展した。現地調査に基づく客観的かつ音韻分析による厳密な調査研究が行われるようになった。

昭和時代になると、『日本歴史地名体系』や『角川日本地名大辞典』が刊行された。世間では、自然開発による地名の消滅が危惧され、地名の重要性が人びとの間でより意識されるようになった。

日本民俗学が地名研究に果たした役割は大きく二つに分けられる。「生活に密着した小さい地名」と「土地の利用者・生活者の視点」である。そして、土地利用の工夫、地形、自然現象、出来事などへの認識や継承のされ方が調査研究対象となった。

近年、積極的な地名研究は日本民俗学では停滞気味であるが、自治体史（誌）において進んでいる。

本章の最後で、具体的な地名の付けられ方が、山、川、海、耕作地、災害地を例に紹介されている。

山については、山に残る雪の形「雪形」が挙げられている。雪形（雪名）は農作業の時期を物象化した残雪の形であり、自然の機微を生活に織り込んだ自然暦である。

川では、川筋の岩のある地点に焦点が当てられている。川筋の岩は、川を生業にする者にとって、水量、

漁の仕方、舟の動かし方などを知る上で重要な表徴である。また、危険を身体に記憶すべく用心の対象である。

海は、漁師の間で伝承されている海底地名とそれを船上から見える景色などを基に記憶する山アテの知識が必要とされる。

耕作地は占有地名の代表であり、地名の大部分を占める。地名は、地形だけでなく、祭礼や穀物の神聖性などと結びついている。

災害地名は、二〇一一年の東日本大震災以降注目されるようになった。災害に関連する語を含む地名はすべてが災害地名ではないが、油断はできない。

第三章「地域の展開」では、国・郡・郷・村など公的な地域名（公的地名）がいかに歴史の舞台に登場し、一方で減っていったのが追求される。そして、公的地名を決める上での諸定義の吟味がなされ、著者独自の「期待地名」という定義とその重要性が説かれる。

国・郡・郷といった公的地名は平安時代前期には存在した。中世になると検地のため村が出現した。人口が増えると町が誕生した。近代に入ると、県、市、町が制定された。村の合併も行われ、大字、字という単位も創られた。昭和三〇年代半ばの高度経済成長長期に、大都市近郊が住宅造成地となった。結果、歴史ある大字や字の地名が消え、新たな住民の意気込みや夢が盛り込まれた「名のり命名」がなされるようになった。市町村合併でも、おかしな命名が提案され物議をかました。「名のり命名」に柳田国男は批判的であったが、著者は前向きである。

地名の分類は、面倒かつ厄介で、方法が確立されていない。定義も様々であるが、著者は柳田国男と吉田東伍の分類を大きく評価している。柳田の地名分類は、(一)土地の利用地名、(二)占有地名、(三)分割地名であり、この順序で土地が命名されていったとする。吉田の地名分類は、おおまかに、(一)地形、(二)土地の位置・形状・性質、(三)特徴的な天然物、(四)人造の存在物、(五)氏族・部民・人物などの呼称、

(六)さまざまな人事、(七)移住などにより元の地名を移したもので、である。柳田の分類は原理的であり、吉田の分類は多くの研究者に参考にされている。以上、様々な定義を踏まえ、著者は独自の地名分類の定義を編み出した。(一)自然地名(四項目)、(二)文化地名(五項目)、(三)期待地名(二項目)である。期待地名は、従来の研究においてほとんど問題にされてこなかった。むしろ、古い地名を破棄して命名されることが多く、揶揄批判の対象となってきた。今後、期待地名はますます増え、人びとの土地への認識や土地活用への希望を探る上で無視できない。

第四章「家の名、人の名」では、家の名を構成する苗字と人の名の名づけ方について日本民俗学の資料を概観し、現代の名づけ事情にも触れつつ、名づけの多様性に迫る。

苗字は江戸時代に一般化し、武士以外が公的に名乗ることができなかった。明治時代になると、四民平等の原則から、武家以外でも苗字を持つようになった。

昭和時代の苗字も、明治時代の方式が踏襲された。昭和の戸籍法は、夫婦が苗字を一にするものとした。近年では、夫婦別姓が議論されている。

以上のような経緯もあり、日本の苗字は現在三〇万ほどある。韓国では二五〇、中国では五〇〇ほどとされる。

同一苗字が多い地区では、混乱しないよう屋号が用いられていた。屋号は、その位置や地形、家の新旧、家柄、生業にちなむものが多い。

家紋や家印は、家の持ち主、格式、同族を表し、屋号と同じ機能を持つ。家紋は平安時代に貴族や武家の間で発達し、江戸時代以降、一般の家々にも普及した。西日本には、女性が嫁ぐ際に実母から継承する「女紋」もあった。

名前は、現在、親の自由裁量によるが、子への何らかの期待感の表現である。名前はまた、実名の使用が避けられる。特に、上役や年長者の名前をじかに呼ぶことは敬遠される。

名前は明治時代以降固定されるようになり、みだり

な複名や改名は禁止された。また、今日、名前の変更は手続き上容易ではない。

名前には、両親などの思いが反映されている。しかし、近年、子どもの名づけには漢字本来の意味を離れ、様々な自由奔放で戸惑う名前が増えていることが問題提起される。

日本では、明治時代から昭和三〇年頃まで、生児の名前は、災厄や不安定な状態から守るべく急いでつけられた。名前は、人の意思ではなく、カミなど超自然的存在から授けられるとされてきた。

名づけには言霊が関与する。例えば、男児が欲しいのに女兒が生まれた場合、女兒の名前をそのままつけると、次は男児が生まれるという「類感呪術」が信じられた。

現代では、占い師や姓名判断で命名する傾向が増えている。合理的な時代であっても、超自然的存在に頼ろうとする心性は衰えない。

第五章「さまざまな命名」では、風、魚、蝸牛の名

称について、日本民俗学の成果を示しつつ紹介される
とともに、著者の「売り」である「名のり命名」の
観点から大学名の分析の試論的考察がなされる。

風の名称は全国で二一四五認められており、風の特
性、人びとの好悪の他、微妙な地形の相違、細かな場
所ごとの風位などによって分類されている。自然を生
業にする人びとにとって風は重要で、多様な風名がそ
のことを示している。自然利用に縁の薄い現代都市部
でも「ビルカゼ」というやつかいな突風が認知されて
いる。

魚に関しては、ほほ^ほ沢^沢敬^敬三『日本魚名集覧』、『日
本魚名の研究』が底本となっている。主に、タイとオ
コゼの名に関心が向けられる。タイの名を持つ日本産
魚類は二百種類を超えるが、生物学的にタイであるの
はマダイである。語源が定かでないことから、どこで
もタイで通用し、派生名も多い。タイという魚名の人
気の高さも影響している。中央とも関係も深く、美味
であることから他の魚類の名にも影響したと考えられ
る。オコゼの名では、一般的に口にされるオコゼとは

オココゼのことであることが確認される。オコゼの
名を持つ魚は三〇種ほどであり、魚だけでなく、イタ
チ、ヘビ、イモリ、毛虫や毒虫を見かけ上の特徴から
オコゼと呼んでいる地域が全国に多い。

蝸牛は、種類も方言名も多い。柳田国男は『蝸牛
考』を記し、蝸牛の方言名と分布、そして方言集圏論
を発表した。柳田は、蝸牛の方言名を、ナメクジ、ツ
ブラ、カタツムリ、マイマイ、デテムシにおおまかに
分類し、デテムシが中央語であり、周縁に行くに従っ
てナメクジと変化するとした。方言集圏論は、今日の
民俗学や言語学の世界では否定されている。しかし、
著者は緩やかにその問題点を指摘しつつも、全否定し
ていない。むしろ、同様の結果が出た松本修『全国ア
ホ・バカ分布図』を取り上げ、方言集圏論の新たな資
料として評価している。

大学名は、二〇一二年の資料によると七八〇あり、
学生数は二九〇万人ほどである。これまで大学の命名
を考えた研究はない。大学名は四分類でき、所在地、
建学の精神・創立の趣意、創立者名、創立時の年号か

ら成る。国公立大学のほぼ全部が所在地による命名である。しかし、大学の特色が見えにくい。私立大学の場合、約六〇〇大学の四分の三が、教学の内容と地名を明示している。建学の精神は、私立大学に多い。創立者名と創立時の年号に関する具体的考察はないが、日本の大学名は、大学側による名のり命名が最も多い。

以上が本書のおおまかな内容である。本書は、正統的な日本民俗学の立場からの命名研究書である。人類学や言語学などの分野でも命名研究は盛んに行われているが、本書の参考文献のほとんどは日本民俗学に関する文献が並ぶ。しかし、著者は、命名に関する理論やエピソードとなった研究をしっかりと踏まえていることが行間から伺い知ることができる。著者は堅苦しい理論を極力表に出さず、命名に関する易しい事例を随所で紹介し、命名に対する我々の関心を高めることに成功している。そして、従来の研究を俯瞰した上で、自身の「名のり命名」「期待地名」を含む。以下、

同様）を世に問うている。

著者は「名のり命名」という命名法とその研究について、新たな領域を創り出した。「名のり命名」に関する研究は、まだ十分に理解されておらず、体系的な研究もなされていない。これからの学問であることを著者は提唱している。研究材料も豊富にある。残念ながら本書では、参考文献を中心に内容が構成されており、著者のフィールドワークに基づいた「名のり命名」研究の厚いデータと記述を見ることができない。エビデンスとなる記述やデータが見えず、非常に物足りない。ただ、参考文献には、著者の「名のり命名」研究の始まりとなったと思われる論文一点が収録されており、著者にとってこれからの研究であることが伺える。著者は、本書の端々に本書ではまかないきれなかった未研究の研究課題について書き留めている。これは御歳七六歳になられた著者の研究意欲の旺盛さだけでなく、若い研究者たちへの日本民俗学調査研究の活性剤と受け取れる。

評者が本書に興味を抱いたきっかけは、評者自身、

特にフィリピンの農民や漁民の自然認識について生態人類学・民族生物学の立場から研究していることによる。自然認識は環境や生物を資源として「名づけの命名」を行い、人の自然との交渉に役立てるものである。人と自然との交渉は、生業目的だけでなく、自然と遊ぶことを始め多岐に及ぶ。人びとが自然や生物を見る眼は豊かさを帯びる。評者は、主に、フィリピンの魚、貝、稲などに関する命名について調べている。

ここでは貝類について触れておきたい。フィリピン・パラワン島南部の焼畑漁撈民モルボッグの貝類の認識に関する事例である(辻 二〇一三)。評者は五五種類の貝類を収集し、それらの名前、利用、民俗などを聞き取った。五五種類のうち三〇種において、命名の意味とパターンが確認できた。形態(一五種)、習性(八種)、色(二種)、道具(二種)、味(一種)、採捕法(一種)にちなんでモルボッグは貝類の命名を文化に取り込んでいる。加えて、貝類の利用に関する事例は、道具(四例)、嗜好品(二例)、玩具(二例)、装飾品(一例)であった。民俗に関する事例は、俗信

(四例)、地名(一例)、禁忌(一例)、修辞表現(一例)であった。このようにサンプル数こそ少ないが、自然認識における命名を研究することで、人びとの環境や暮らしぶりを知るだけでなく、観念や価値観など頭の中身の仕組みに迫ることができる。本書は自然認識の観点から、命名、自然、文化、心意、価値観の相互交渉をひもといっており、きわめて示唆に富む。

フィリピン社会においても、本書で挙げられた名づけの文化史は共通するところが多い。おそらく世界各地においても同様の現象、あるいは本書ですくい切れなかった事象が存在するであろう。フィリピンは長くスペインの植民地であったことから、スペイン系の苗字を持つ人びとが多い。中国系フィリピン人の中には、スペイン人の迫害を逃れるために改名した者もいるが、わずかながらの抵抗としてか中国語名をスペイン語名風にアレンジした苗字が見受けられる。イスラムの間では、苗字に父親の名を名乗り、代々継承している人びともいる。先住民の中には、動植物の名を苗字や名にしている人びともいるが、植民地制度や

近代の制度によってあわてて命名を行った結果なのであるうか。幼名に昆虫や動物などの奇妙な名を持つ人びともいるが、日本の場合とほぼ同じ論理であろう。フィリピンもまた命名についてユニークな特徴を持つ文化圏であるが、本書のような本格的な研究は行われていないのが現状である。

「名のり命名」については危惧もある。評者はフィリピンのパラワン島南部で主に調査をしてきたが、現在訪問を控えている。フィリピン領海への中国の進出とアメリカによる牽制、そしてイスラーム過激派とそれに類する集団の脅威がある。パラワン島南部はまさにそのホットスポットになりかねない状態である。二〇〇一年に起きたニューヨーク同時多発テロ「9・11事件」に共鳴する地域住民もいる。評者の現地の人々は、授かった子どもに未来への期待や決意を示してか、同テロの首謀者とされる「ビンラディン」君と命名した。日本でもかつて、自らの赤ん坊に「悪魔」という名前を付けた両親の訴えが、役所によって強制的に却下された事件があった。これらは極端な例

であろうか。親の期待が子どもの将来に有利に働くかは不明であり、憎悪を再生産することにもつながりかねない。著者は性善説に立つて「名のり命名」を提唱しており、新たに生成されつつある命名を研究することで、よりよい未来を見据えている。ネガティブな命名についてもそれらを研究することで、人びとや社会・国家・世界が抱える問題を是正していくことが可能であろう。「名のり命名」とは単なる命名研究の続編ではなく、人類の未来をふくよかにするための重責のある学術領域である。

引用文献

辻貴志 二〇一三 「フィリピン・パラワン島先住民モルボツグの貝の採捕と民俗知識」『年報人類学研究』第三号、九七一—一二一頁 (<http://www.ic.nanzan-u.ac.jp/JINBUKEN/publication/>) PDF版を入手可能。ただし、図表は開けず：二〇一六年七月八日時点。

(吉川弘文館 二〇一四年 二三四頁 一七〇〇円＋
税 ISBN978-4-642-05773-8)